

博士論文概要書

『古事記』の構想―神代から皇代へ―

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程研究生 折原 佑実

## 一、研究業績

### ○論文

- ① 『古事記』天孫降臨条の表現と構想―記紀比較を通して― 修士論文、二〇一四年
- ② 『古事記』におけるホフリ―『日本書紀』との比較を通して―  
早稲田大学大学院教育学研究科別冊第二二二号（二〇一五年三月）
- ③ 『古事記』上巻における「八百万神」「諸神」  
『古代研究』第五一号、早稲田古代研究会、二〇一八年二月
- ④ 「令占合麻迦那波而」にみる『古事記』天石屋戸段の構想  
早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊第二一九号（二〇二二年三月）
- ⑤ 「応神記ヒボコ系譜の役割―系譜記載方式と時間認識との関わりから―」  
『国語と国文学』二〇二三年九月号（掲載決定、二〇二三年二月現在校正中）

### ○学会発表

- ⑥ 『古事記』における天浮橋の機能と役割―記紀比較を通して―  
早稲田古代研究会研究発表会、二〇一三年三月
- ⑦ 『古事記』天孫降臨神話の表現と構想  
早稲田大学国語教育学会第七回学生会員研究発表会、二〇一三年一月
- ⑧ 「古事記中巻開化天皇条（二）」（講読）  
古事記学会例会、二〇一四年一月
- ⑨ 「開化記日子坐王系譜―系譜と皇統―」  
早稲田大学国文学会秋季大会、二〇一五年二月
- ⑩ 『古事記』天石屋戸段について―「八百万神」「諸神」の役割―  
早稲田古代研究会研究発表会、二〇一七年一〇月
- ⑪ 『古事記』天石屋戸条「令占合麻迦那波而」をめぐって  
古事記学会大会、二〇一九年六月
- ⑫ 「応神記ヒボコ系譜をめぐって」  
上代文学会大会、二〇二一年五月

## 二、目次と各論概要

### 序章 『古事記』の構成と表現

#### 第一部 神話の諸相と神代の構想

第一章 降臨神の交替―記紀天孫降臨神話の諸相―

第二章 ウケヒ・天石屋戸段と天孫降臨段

第三章 高天原における意思決定と「八百万神」「諸神」

第四章 「令占合麻迦那波而」にみる『古事記』天石屋戸段の構想

#### 第二部 天皇の系譜と皇代の構想

第一章 「天津日高日子穗穗手見命」にみる「天神の御子」の変容

第二章 『古事記』『日本書紀』の綏靖・安寧・懿徳天皇后の異同をめぐって

第三章 開化記日子坐王系譜の構造と性格

第四章 応神記ヒボコ系譜と『古事記』の時間

終章 神代から皇代へ

## ○各論概要

### 序章 『古事記』の構成と表現

『古事記』は大和王権の由来を説くことを目的に編纂された史書であり、天地開闢からカムヤマトイハレビコ（のち初代神武天皇）の誕生までを記す上巻、神武天皇の即位から欠史八代系譜を挟み崇神天皇から応神天皇までの事績を記す中巻、そして仁徳天皇から顕宗天皇までの事績と以降推古天皇までの系譜を記す下巻の三巻から成る。本論文では、そのうち神々の活動を中心に話が展開する上巻の時代を「神代」と呼び、天皇を中心として系譜や事績が語られる中、下巻の時代を「皇代」と称することとする。

なお、『古事記』と類似した記事を有する同時代の史書に『日本書紀』があるが、両書を比較すると、記事の有無や順序、神名や人名、文字遣いなど、大小さまざまな差異が認められる。また、『日本書紀』神代巻では、各章段に複数の異伝が存在し、章段間の接続があいまいとなっている。対して『古事記』は一つの作品として成立する以上、表現も全巻を通して一貫した方針のもとに用いられていると考えられる。よって『日本書紀』の所伝に見られない『古事記』独自の文字表現や記載形式に注目することにより、『古事記』が実現しようとしている全体の構想を知ることができると考える。

### 第一部 神話の諸相と神代の構想

#### 第一章 降臨神の交替―記紀天孫降臨神話の諸相―

『古事記』天孫降臨条では、タカミムスヒ（タカギ）、アマテラス二神の司令のもと、アマテラスの子オシホミミが降臨に失敗し、葦原中国平定後に改めてオシホミミの子ホノニニギが降臨を達成する。一方、天孫降臨神話を載せる『日本書紀』第九段の正文及び一書群諸伝には、タカミムスヒを司令神としてホノニニギの降臨のみを語る系統の所伝（正文、一書四、一書六）とアマテラスを司令神としオシホミミからホノニニギへの降臨神の交替が行われる系統の所伝（一書一、一書二）が存在しており、『古事記』の天孫降臨条はそれらの二系統を複合したような形態となっていることが特徴的である。

記紀で降臨神の交替を語る所伝は、アマテラスを中心とした、あるいは相対的にタカミムスヒよりアマテラスの地位が高い所伝だといえる。『古事記』天孫降臨段はアマテラス・タカミムスヒ（タカギ）が司令神として並立する形態を採っているが、別天神タカミムスヒを「タカギ」と呼び変え、記載順をアマテラス先行に変化させていくなど、アマテラスを優位に立たせようとする表現上の工夫を凝らしている。

また、ホノニニギは記紀でどちらの系統の所伝においても地上への降臨を果たす「皇孫」（『古事記』では「天神御子」「天津日高日子」が相当するか）として確固たる地位を築いている存在である。『古事記』においてホノニニギは皇祖神「天神の御子」の中で始めて、婚姻によって「生」まれた存在であるが、タカミムスヒと血縁関係をもたないオシホミミを「太子」と呼称することで、『古事記』はアマテラス―オシホミミ―ホノニニギの系統こそが皇統の主軸であることを強調する。以後、ニニギが山神の女コノハナノサクヤビメを娶ることによってホホデミが生まれ、ホホデミが海神の女トヨタマビメを娶ることによってウガヤフキアヘズが生まれることとなるが、これらの婚姻に「天神の御子」と呼ばれる神々が山の呪力、海の呪力をその血に取り込んでいく過程をみるならば、オシホミミとヨロヅハタトヨアキヅシヒメとの婚姻も、後の天皇の系譜につながるアマテラス由来の系譜に「別天神」タカミムスヒの血が取り込まれたことを示すものとみることができよう。

葦原中国の統治権が「天神の御子」にあることが明確化され、皇祖神が初めて地上に降臨する『古事記』の天孫降臨段が、上巻神話の展開のうえで大きな転換点であることは疑いない。その中で、オシホミミとアキヅシヒメとの婚姻を契機に「血」を媒介とした資質の継承がはじまることは、同時に中下巻を貫く皇統譜がここに始発することを示すのではないか。

## 第二章 ウケヒ・天石屋戸段と天孫降臨段

単一の時間軸を有する『古事記』において、オシホミミが誕生するのはウケヒ神話においてであり、神器の製作、またアマテラスの復活に関わる神々についての記述がイハヤト神話にあることをふまえれば、ウケヒ・天石屋戸段と天孫降臨段が上巻神話の中でも特に緊密に結びついていることは間違いない。

記紀の天孫降臨諸伝を見る限り、天孫降臨神話の本来の主宰神がタカミムスヒであった可能性は非常に高い。しかし『古事記』は最初アマテラスとタカミムスヒをほぼ同等か、別天神タカミムスヒの方を格上として扱っておき、数度の使者派遣を語る中でアマテラスを先に表記し、タカミムスヒの呼称をタカギに変え、アマテラスの「太子」としてのオシホミミを強調することでアマテラスを皇祖神とする天孫降臨を語ろうとした。アマテラスはイザナキの分治令によって高天原を治めるよう指示された神であるが、天石屋戸段での事件によってその影響力は「高天原及葦原中国」に及ぶものであり、アマテラスなしに高天原も地上世界も正常に機能しないことが示されているのであるから、アマテラスが皇祖神たる存在とされても、違和感はない。『古事記』のウケヒ・天石屋戸段は、ウケヒの結果として子の帰属に言及することでアマテラスとオシホミミの親子関係を明示し、高天原秩序の中心たるアマテラスを描写することで、アマテラスを「皇祖」に据える天孫降臨段の構想を支えている。

## 第三章 高天原における意思決定と「八百万神」「諸神」

『古事記』天石屋戸条では、天石屋戸に籠ったアマテラスを導き出すため、高天原の「八百万神」が天の安の河原に集会し、思金神に作戦を考えさせ、占いの結果をもとに神々を使役して作戦を進めていく。「八百万神」が自主的に集会し、作戦を主導する形態の石屋戸神話は『日本書紀』には見られず、『古事記』において「八百万神」が重要視されていることは注目される。「八百万神」はのちの天孫降臨条でも登場し、「諸神」と名を変えて、司令神の諮問機関のような働きをみせている。天孫降臨段では、タカミムスヒとアマテラスが八百万神と思金神の答申に従って使者派遣を行い、二度にわたって失敗しているが、三度目まで意見を求められるのは変わらぬ諸神と思金神であり、他に意見を求めようとはしない。そして「八百万神」「諸神」と「思金神」は司令神の諮問に対し、「余、思金神及八百万神、議白之」と、議論によって答えを導き出し、答申するという形式を採っている。アマテラスとタカミムスヒが司令神として並び称され、話題の中心が高天原から地上世界に移るに至って、既に天神は占いによって意思決定を行うことがなくなり、代わりに意思決定の際の助言者として「八百万神」「諸神」と「思金神」とが設定されるようになったのではないだろうか。

## 第四章 「令占合麻迦那波而」にみる『古事記』天石屋戸段の構想

『古事記』天石屋戸段は、アマテラス不在の高天原において特定の神が主導して問題を解決するのではなく、残された神々が「ウラナヒ」によって得られた「神意」を方針として共有し事態を収束させるという方式を採っている。『古事記』において「フトマニ」による卜占という方法が採られるのは高天原・国家の重要な局面に限られ、それによって得られる「神意」は『古事記』全体を貫く絶対的な指標として機能していると考えられる。『古事記』天石屋戸段では思金神や伊弉諾伊弉尊等の神々に指令を下す存在として「八百万神」の地位が高く設定されているが、その「八百万神」が「ウラナヒ」という手段を用いてアマテラスを招きだす祭式を完成させようとしたことは、イザナキ・イザナミに子生みの失敗を報告された「天神」が「ウラナヒ」によって得た「神意」をもとに二神に回答した状況と通じるものがあるように思われる。すなわち、「天神」も「八百万神」も高天原においてある程度上位の神々であるが、絶対的な判断能力を持つわけではなく、「ウラナヒ」によって得られる「神意」に頼ることで問題解決にあたっている。これは、アマテラス不在の天石屋戸段において、高天原が自身の内部で問題を解決する能力をもたないことを示しているのではないだろうか。アマテラスはイザ

ナキから高天原の統治を任された存在であるが、のちにアマテラスとタカミムスヒ（タカギ）の主導のもと、高天原は試行錯誤の末にホノニギを地上に降臨させることに成功する。『古事記』天石屋戸段は、アマテラスを欠いた高天原において全体を主導する「個」が存在せず、自力で困難を克服できない様子を描き出すことによって、高天原の自立した意思決定に統治者アマテラスの存在が不可欠であることを強調していると考えられる。

## 第二部 天皇の系譜と皇代の構想

### 第一章 「天津日高日子穗穗手見命」にみる「天神の御子」の変容

『古事記』上巻において、ホフリ（火遠理命）は皇祖神ホノニギと山神の娘コノハナノサクヤビメの第三子として誕生する。ホフリは「天津日高日子穗穗手見命」のほかに、「虚空津日高」という別称も併せ持つ神として『古事記』では描かれている。アマテラスからウガヤフキアヘズに至る全五代の皇祖神のうち、複数の別称を有するのはホフリのみであり、さらに、『古事記』において初めて宮の所在、御陵の所在が記されるのもホフリである。

宝算・御陵記事は、中巻以降の各天皇段に共通する記事であるが、上巻末にホホデミの宝算・御陵記事が存在することは、地上に降った「天神の御子」が「天皇」に近づきつつあることを示す。続くウガヤフキアヘズとタマヨリビメとの婚姻、生まれた御子たちについての記事が中巻以降の天皇段のいわゆる「后妃皇子女記事」の記載形式を採っていることと合わせて、上巻神話の世界に起源し、上巻神話に保証される「皇統譜」を形成していこうとする『古事記』の姿勢がうかがえる。

### 第二章 『古事記』『日本書紀』の綏靖・安寧・懿徳天皇後の異同をめぐって

『日本書紀』において、神武天皇から懿徳天皇までの后がコトシロヌシ由来であることは、『日本書紀』という作品内で「コトシロヌシ」という神が国家を守護する神として高い地位に置かれていることをふまえ、王権とコトシロヌシとの結びつきが強固であることを、天皇の系譜にコトシロヌシを組み込むことで示そうとしたものと考えられる。

一方『古事記』では、中巻以降、王権にほとんど干渉することがないコトシロヌシを皇統に取り入れる意味はない。また『古事記』の構想のうえで神武天皇の時代が「天神の御子」が「天皇」となる大きな転換点であり、綏靖天皇以後「神の女」を后として迎える天皇が存在しないことは、神武天皇の時代にはまだ身近であった「神」と「天皇」の距離がしだいに開いていくことを示しているのではないか。

神武天皇が「神の女」を娶る最初で最後の天皇であることは、カムヤマトイハレビコが上巻神話に生まれた最後の「天神の御子」であり、同時に最初の「天皇」であることと深く関わるであろう。かつて「天神の御子」と呼ばれた神武天皇が、「神御子」であるイスケヨリヒメを后として誕生したのが綏靖天皇であり、その瞬間に、アマテラスに発祥する「天神の御子」の系譜は「天皇」の系譜に更新される。

### 第三章 開化日子坐王系譜の構造と性格

『古事記』開化天皇条中の王子日子坐王の後統系譜は、皇子の子女総数が明示され、数代にわたる長大な系譜情報が記載されている点が特徴的である。日子坐王系譜は、四人の后との後統系譜で構成されるが、それぞれの系譜末代に垂仁記、仲哀記などに登場する人物名がみえ、それらの人物の出自を示す系譜として機能していることがうかがえる。

山代之姪名津比賣との孫である曙立王・菟上王、また沙本之大閻見戸賣との子沙本毗古王・沙本毗賣命は垂仁記の沙本毗古の反逆からその子ホムチワケの言語不通をめぐる記事において登場する人物であるが、曙立王・菟上王の出自が皇統に求められたのは、上巻で大国主神が国譲りに際して宮の造

宮の要求を天神御子に対してしたことから、天皇家に応じる義務があるからだと考えられる。また、沙本毗古・沙本毗賣については、皇位の篡奪を狙い得るために、天皇家の血を引いていることが必要とされたためであろう。

息長水依比賣、袁祁都比賣との子孫である比婆瀨比賣、息長帯比賣はそれぞれ垂仁天皇、仲哀天皇の后となるが、次代以降の天皇の母となる后の出自を皇統に求めるのは記紀に共通する性質として認められる。

『古事記』の日子坐王系譜は、中巻の様々な記事との関わりから、複数の目的を達成するために統合され、肥大化した系譜であると考えられる。このような系譜のあり方に、皇位継承の正統性を明示するためだけでなく、事績記事における『古事記』の主張を支えるために積極的に系譜という道具を活用しようとする『古事記』の表現姿勢をみることができている。

系譜と事績とが互いを前提とし、また補いあうことで、『古事記』中巻の「歴史」が紡がれている。『古事記』日子坐王系譜は、このような『古事記』の「系譜」に対する姿勢が顕著に表れた系譜とみることができているのではないか。

#### 第四章 応神記ヒボコ系譜と『古事記』の時間

『古事記』応神天皇段には、新羅王子ヒボコの渡来、ヒボコの系譜、ヒボコが将来した神宝、神宝由来の女神イズシヲトメをめぐる兄弟争いの記事が存在する。一連の記事については、ヒボコがオキナガラシヒメと系譜上結び付けられていること、将来した神宝の中に航海に関わる呪具が含まれることなどから、従来、仲哀―応神天皇段にかけての「征韓」志向を保証する性格をもつことが指摘されてきた。

また、『古事記』のヒボコ関連記事の特徴として、先の二つに加えて、応神天皇段に収められながらヒボコの渡来が「昔」の事件とされていること、神宝由来の女神イズシヲトメの記事が付属していることが挙げられる。『古事記』のヒボコは漠然とした久しい過去としての「昔」に渡来し、その活動は当時の大和王権とは一切の関わりをもたない。またイズシヲトメの記事についても、女神をめぐる争う兄弟の出自も不明なうえ、神婚の結果誕生した子も名無しで、子孫についての言及がない。これらの記事は『古事記』の時間軸から乖離し、記事内容としても独立しているように思われるが、ヒボコの系譜、神宝の記事と連続して収められている以上、同様に新羅征討との関わりにおいて意味を見出されるべきである。

『古事記』は『日本書紀』と異なり、異伝を認めず単一の通時的な時間軸を有する。オキナガラシヒメによって新羅が新しい支配領域として開かれるという歴史認識をもつ『古事記』において、渡来当時のヒボコが王権と関わらないことは自然である。ヒボコは、新羅王子として系譜上オキナガラシヒメの「征韓」事業を保証しながら、自身は王権に関わることなく『古事記』の天皇中心の時間軸上に座標をもたないという二面性をもつ。その二面性こそが、仲哀―応神天皇の時代に「征韓」が達成されるという『古事記』の歴史認識を血統・時間的整合性の両面から支えているといつてよい。

#### 終章 神代から皇代へ

『古事記』『日本書紀』ともに、その編纂目的の主たるものが神話時代をも含めた「歴史」による王権の保証であることは当然である。しかし編年体を採用し、自身が中心に据えた所伝の主張を揺るがしかねない異伝をも（一書）（二書）として記録する『日本書紀』と『古事記』の編纂意識は大きく異なる。異伝の存在を許容せず、上巻ははじめに天地が分かれてから、下巻末の推古天皇の崩御までのすべての事件を連続した単一の時間軸の上に配置する『古事記』の形態は、上・中・下巻を統一された構想のもとに組み立て、作品全体を通して王権の正統性を主張し続けることを可能にしている。さらに、単一の時間軸の存在は、山神の娘との婚姻により短命を代償とした繁栄の保証を獲得し、海神の血を

取り込み、「天神の御子」が「天皇」と成り、新羅王子の血を引くヒメが新羅を征討し、それまでの全ての資質を継いだ応神天皇の血が下巻すべての天皇に引き継がれるという、作品全体とおした皇統譜の形成と成長、そして完成の過程を、系譜記事と事績記事との緊密な相互補完関係のもとに可視化することに成功しているといつてよい。